

人間生命の諸悪に敢然と挑戦

（御書全集 七一〇頁十八行目～七一〇頁二行目）
編年体御書一五五六頁十八行目～一五五七頁二行目

今日蓮等の類たぐいは阿闍世王あじやせおうなり其の故は南無妙法蓮華經の劍つるぎを取って貪愛とんあい・無明むみょうの父母を害して教主釈尊の如く仏身かんよくを感得するなり

この一節から、私どもは、信心の、そして人生の根本目的である成仏をめざす究極の姿勢を知ることが出来ます。とくに強く銘記したいことは、法戦のないところには、成仏は断じてありえないとの、日蓮大聖人の明確な御教示なのであります。

すなわち「貪愛・無明」という生命の魔性から自身の内外に競い起こるさまざまな障魔に、敢然と立ち向かい、戦いぬいてこそ「教主釈尊の如く仏身かんよくを感得」できる、成仏できる、との御本仏のおお

せを胸に刻みたいのであります。

さて、まずこの一節において、日蓮大聖人は、提婆達多^{だいばだつた}を師として父の殺害、破仏法という悪逆のかぎりをつくした阿闍世王^{あせきおう}をさして「今日蓮等の類^{たぐ}いは阿闍世王なり」とおおせられています。ここには甚深^{じんじん}の意味があります。

歴史上の阿闍世王は、釈尊在世から滅後にかけての中インド・マカダ国の王で、のちに名医・耆婆^{きば}の諫め^{いさめ}もあって改心、仏法久住のために余生をささげたことはよく知られております。しかし、ここで展開されているところの阿闍世王とは、歴史上の一人物というより、万人に通ずる阿闍世王としての生命の活動をさしております。

阿闍世王とは梵語^{ぼんご}の音写で、未生怨^{みしやうおん}と訳されております。すなわち「生まれる以前にすでに怨^{うら}みをもつ」という意味ですが、この「怨む」という生命の一断面は、だれもがもっております。

ソクラテスの言葉に「最も深き欲望より、しばしば最も恐ろしき憎悪は起こる」とあります。

われわれの立場でこの言葉を読めば、欲望とは貪愛、無明であり、憎悪とは未生怨そのものでありましよう。この、恐ろしいまでに深く人間を蝕^{むしば}む生命の傾向性に、仏法哲理の光を鋭く照射し、どう克服し、人間革命し、成仏をめざすべきかを明かされたのが、この一節であります。

この上の文には「日本国の一切衆生は阿闍世王なり」（御書全集七一〇頁）とあります。

この御文は、七百年の歳月を越えて、そのまま病める現代社会の根本原因を照らしだす明鏡とも拝することができます。殺人、暴力等の横行している現代の世相の荒廃をみるとき、人々の生命の奥に

潜む「怨」という魔性の根の深さを思わざるをえません。私どもも、もしこの大仏法を知らず、真実の和合僧に縁することができなかつたならば、かならずやこの「怨」の生命に支配され、社会の揺れ動くままに、無明の淵をさまよっていたでありましょう。

私どもが日々、汗を流しつづけている折伏弘教は、この濁世の根本原因を撃ち、そこに歓喜踊躍の深い傾向性の流れをつくつていく尊い作業なのであります。ゆえに、さまざまな非難中傷の嵐が吹き荒れることは、当然の帰結なのであります。

ところで大聖人は、ここで「日蓮等の類いは阿闍世王なり」と、まったく正反対の阿闍世王を示されているのであります。これまさしく妙法によって蘇生した真実の阿闍世王なのであります。

なぜならば、そのとき南無妙法蓮華經の光明に照らしだされた未生怨の生命は、貪愛、無明を冥伏させる力となって、発揮されるからであります。すなわち、この内なる生命悪を断破する阿闍世王の生命は、不正を憎み、生存の権利を脅かすものと対決しつつ、民衆を嚴護する果敢な闘志として昇華されるのであります。

「南無妙法蓮華經の劍を取って貪愛・無明の父母を害して教主釈尊の如く仏身を感じ得するなり」と説かれていのように、貪愛、無明という人間生命に巣くう根源悪を、南無妙法蓮華經という至高の生命をもって打ち破っていく——それこそ妙法の阿闍世王の姿勢であり、成仏への方途なのであります。

ここで、「殺す」あるいは「害する」——総じて殺害ということについて、ひとこと申し上げてお

きたい。

仏法とは、いかなる意味でも人を殺すものではなく、本源的に人を救い、生かすものであります。

その点が、西洋中世に猛威をふるった「魔女狩り」等とは、根本的に異なるところであります。

「釈迦の以前仏教は其の罪を斬ると雖も能忍の以後経説は則ち其の施を止む」(御書全集三〇頁)とおおせのように、とくに大乘仏教にあっては「殺す」ということは、厳しく戒められているのであります。

ではいったい、なにを殺すのか。御本尊への絶対の信という利剣をもって、わが生命に巣くう貪愛、無明の心を殺すのであります。真実の宗教は、史上、幾多繰り返された血なまぐさい宗教戦争に民衆をかりたてたりするものであってはならない。また、人々を自殺に追い込む哀音の宗教であつてもならない。人々に、生きて生きて生きぬく力をわきたたせずにはおかぬものであります。

大聖人の仏法は、縁するすべての人々の生命を、貪愛、無明の闇から、元初の太陽の赫々たる陽光に浴せしめるのであります。妙法が、いっさいを生かし、蘇らせていく「蘇生の義」とされるゆえにもここにあることを、知っていただきたいのであります。

さらに「教主釈尊の如く仏身を感じ得するなり」とは、信心に徹することによって、教主釈尊、すなわち久遠元初の自受用身即日蓮大聖人の御命を、総じては、そのままわが身に湧現できるとのおおせなのであります。「教主釈尊の如く」とは、教主釈尊のようにと、一往、拝することができます。

しかし、「如は不異に名く」(御書全集七八二頁)との御金言にみられるように、「如く」とは「異な

らない」「等しく」と、より深く拝していくことが可能でありましょう。

じつに凡愚下賤の私どもであっても、唱題に励み、弘教に励むことによって、御本仏と等しい境界にまで達することもできうとの、甚深の御文と拝することができるのであります。まことにまことに、もったいないかぎりであります。

金剛不壊、清浄にして無垢なる久遠名字の如来の生命が、まぎれもなく現在一瞬のわが生命に豁然と蘇ってくる——私は、感涙おさえがたしの思いを、いやまして深くするのであります。

その大哲理を奉じた私どもであります。どうか、いちだんと勇猛精進の努力を奮い起こして、日々、苦難の社会との戦いを勝ちぬいていってくださるようお願いし、講義を終わらせていただきます。

索引

題 名	(御書の ページ)	(本書の ページ)	年 月 日	掲載紙誌・会台
「諸法実相抄」講義	(1358)	3	52.1.1~6	聖 教 新
「生死一大事血脉抄」講義	(1336)	93	52.4.18~30	"
「観心本尊抄」講義	(246)	185	53. 1~2	大 白 蓮
「佐渡御書」講義	(956)	271	41. 4~5	高 等 部 講
「如説修行抄」講義	(501)	333	41. 6~7	"
「経王殿御返事」講義	(1124)	393	35. 9. 8	姫路市指導
「一生成仏抄」講義	(383)	417	36. 4.23	関西地区部長
「富木殿御返事」講義	(962)	441	37. 4. 5	埼玉地区部長
「兄弟抄」講義	(1087)	459	37. 4.12	婦 人 部 講
「曾谷殿御返事」講義	(1055)	485	37. 8. 9	夏 季 講 習
日々の教学				
「報恩抄」講義	(328)	515	52. 7.12	聖 教 新
「法門申さるべき様の事」講義	(1268)	532	52. 8. 1	"
「撰時抄」講義	(288)	551	52. 8.13	"
「開目抄」講義	(223)	565	52. 9. 1	"
「日女御前御返事」講義	(1247)	573	52.10.18	"
「種種御振舞御書」講義	(917)	577	52.10.20	"
「祈禱抄」講義	(1347)	582	52.10.22	"
「御義口伝」講義	(710)	588	52.10.24	"

著者略歴

昭和3年1月2日、東京都に生まれる。

富士短期大学経済学科卒業。

現在、創価学会名誉会長。

主な著書、「人間革命」(第1巻～第10巻)、
「生命を語る」(第1巻～第3巻)、「生活の花
束」「詩集 青年の譜」「家庭革命」「婦人抄」
「わたくしの随想集」「私の人生観」「若き日
の読書」「創造家族」「二十一世紀への対話」
上・下(共著)他。

新版 池田会長全集 10

発行日 昭和五十五年五月三日

第三刷 昭和五十六年二月十六日

著者 池田大作

発行者 松岡 資

印刷所 株式会社精興社

製本所 牧製本印刷株式会社

発行所 聖教新聞社

〒一六〇 東京都新宿区信濃町十八

電話〇三―三五三―六一一(大代表)

振替口座 東京五―七九四〇七

*

落丁・乱丁本はお取り替えます

Printed in Japan ©1980

定価 二、〇〇〇円